平城宮第２７４次発掘調査
（東面大垣・東一坊大路西側溝）
現地説明会資料

1997年６月14日
奈良国立文化財研究所
平城宮跡発掘調査部

１　はじめに

平城宮第274次調査は、平城宮の東南隅に近い部分で、東面大垣とそれをはさんで南北方向に流れる二条の大溝と、さらにその内側の官衙との間の遺構の様相を明らかにすることを主な目的としたものです。調査面積は約１８００㎡で、４月１日に調査を開始し、現在も継続中です。

これまでの発掘調査によって、平城宮の南面と同様に東面にも大垣が造営されたこと、その東側に東一坊大路西側溝が、西側には宮内基幹排水路がそれぞれ流れ、本調査区の西隣りに奈良時代前半には式部省東官衙（下層遺構）、奈良時代後半には神祇官（上層遺構）があったと考えられています。日本の宮都では、中国と異なり京を取り巻く城壁が明瞭でありません。従って、大垣こそ都城の偉観を誇示するものです。大垣と溝を含む宮の東南隅の実態を解明することは、古代の宮都を知る上で重要なことといえます。

２　検出した遺構

築地塀１（東面大垣）　大垣とは、平城宮を京域と区別するために四周に設けた築地塀のことです。東面大垣は宮の東辺を画するもので、今回の調査区の北方で東院の南面大垣に連なります。今回は、東面大垣を南北約50ｍ分検出しました。調査区南端では後世の攪乱のため残りが悪いですが、今回検出した大垣は、後世に道路として利用されたためにそれほど削られておらず、これまでの平城宮大垣の調査においてもっとも良好に残っていた事例です。大垣は土と粘土を交互に突き固める版築と呼ぶ工法で作られ、版築の積土は現状で厚さ約 0.7ｍ残っています。版築の際に用いる堰板を留める添柱穴も確認しています（大垣の造り方については図２を参照）。平城宮を取り囲む大垣のうち、北面大垣は遷都当初掘立柱塀で、後にその位置に築地塀に作り替えられていますが、東面大垣については今回の調査による限り、築地塀の前身をなす掘立柱塀はなかったようです。

柱列２（足場穴）　東面大垣の西側に、一列に並んだ小さな柱穴を検出しました。これは大垣に瓦を葺くときや修理・解体の際に組んだ足場の柱穴列です。柱間寸法は多くは0.75~2.2ｍと不揃いですが、従来の調査でも柱間は一定していないことがわかっています。

建物３　調査区の北、東面大垣と東一坊大路西側溝の間にある桁行３間、梁行２間の掘立柱建物です。柱穴より出土した土器から、奈良時代の前半に建てられたと考えられます。また建て替えが行われているようです。

掘立柱塀４　東面大垣の東に沿って南北方向にならぶ柱穴を部分的に確認しました。建物３の南に５間分、調査区南では１間分検出しました。柱間９尺の掘立柱塀で、東面大垣が完成するまで機能した仮設的な塀だった可能性もあり、今後の調査が期待されます。『続日本紀』和銅４年９月丙子（４日）条には、諸国から徴発された役民が平城京造営に疲れ逃亡し、平城宮の垣が完成せず宮の防守が不備のため、臨時に軍営を立てて武器庫を守ったとあり、大垣の造営が容易に進まなかった状況が推測されます。

建物５　調査区の南、東面大垣と東一坊大路西側溝の間にある桁行３間（柱間６尺）梁行２間（柱間６尺）の掘立柱建物です。

道路６（東一坊大路）　平城宮の東側を南北に走る大路です。東西両脇に側溝があって、道路幅は溝心間で約23ｍと考えられています。今回は西側溝だけを検出し、また路面をつくる際の整地土を確認しました。

大溝７（東一坊大路西側溝）　東一坊大路の西側に掘られた排水溝です。平城宮内から小子門の西脇を抜けて大路の側溝になるもので、本調査区内では、平城宮の東面の外堀としての役割をかねています。堆積は大きく上下二層に分かれ、幅は上層で約６ｍ、下層で約 ２～2.5ｍ、深さは全体で約１ｍの素掘りの溝です。第39次調査（小子門周辺。1966年度）や第234－９次調査（左京三条一坊十六坪。1992年度）の発掘では大溝に杭・側板や石組みなどの護岸施設があったことを確認していますが、今回は確認できませんでした。但し、調査区南部分では溝の法面に段がついていますから、護岸施設があった可能性も残ります。出土遺物と溝の堆積を観察した結果、大溝は奈良時代の後半に掘りなおしたもので、溝の下層は奈良時代後半の堆積、上層は平安時代以降の堆積と考えられます。下層の堆積土は木屑を多く含んでおり、木簡を含む多量の遺物が出土しました。

大溝８（宮内基幹排水路）　平城宮の内部を南北に流れる基幹排水路の一つです。上流は造酒司の西側で確認しており（第154次調査。1983年度）、本調査区の南では南面大垣を出て二条大路北側溝に合流して東に折れ、さらに道路６と二条大路の交差点部分で大溝７に合流します（第32・32次補足調査。1965・66年度）。堆

積は大きく上下二層に分かれ、幅は上層で約６ｍ、下層でも３～４ｍもあり、深さは全体で1.1～1.3ｍです。溝には改修した痕跡があり、東岸部分に石垣護岸を設け、溝心もやや西にずらしたようです。当初の溝が素掘りだったのかあるいは護岸施設があったのかは不明ですが、杭列を護岸に伴うものと見ることも可能です。溝の堆積は数時期に区別できますが、下層は奈良時代後半の堆積、上層は平安時代の堆積です。大溝８は大溝７と異なり下層の堆積土に砂礫が多く、水量や流速の違いを物語っています。

橋９　大溝８（宮内基幹排水路）に架かる橋と考えられます。梁行３間（柱間５尺）桁行１間（７尺ないしは6.5尺)と考えられ、橋脚の柱がそのまま残るものもあります。橋の年代については後述します。

掘立柱塀１０　西隣の第273次調査区（1996年度）で検出していた５間(７尺等間)の南北塀です。この塀は調査区の西にあった官衙と橋の間の目隠し塀として機能していた可能性があると考えられます。

掘立柱塀１１　第273次調査区から続いてくる柱間８尺の東西塀です。今回その続きの柱穴を１基のみ確認し、大溝８のすぐ西で終わることがわかりました。時期は奈良時代前半と考えられます。

建物１２　掘立柱塀１１の南にある、第273次調査で検出した掘立柱東西棟建物。今回、東妻柱筋を検出しました。桁行３間（柱間８尺）梁行２間（柱間７尺）で、南北に庇（7.5尺）がつきます。

建物１３　調査区西南隅にある、第273次調査で検出した掘立柱建物。今回、桁行３間以上（柱間9.5尺）梁行２間（柱間８尺）の南北棟であるとわかりました。

東西溝１４　調査区西北隅で大溝８（宮内基幹排水路）に注ぐ素掘の東西溝。神祇官の北面築地北側の排水路です。

暗渠排水施設１５　第273次調査で検出した石組み排水施設。凝灰岩の切石を東西に２列並べて底石とし、両側に石を立てて蓋石を置いていたようです。東側には大溝８に注ぐ溝があります。神祇官内の水を、その東面築地を潜らせ大溝８に排水するための施設です。

建物１６　建物１３の北にある掘立柱南北棟建物。桁行３間（柱間10尺）梁行２間（柱間8.5尺）。

第273次調査にかかる遺構を、今回の知見も踏まえて解釈してみます。まず下層の式部省東官衙の時期では、塀11、建物12、建物13などがありました。この時期には、東官衙の東面を区画する南北塀は存在しなかったようです。大溝８に架かる橋９の年代ですが、橋９の橋脚の柱を据え付けるときに掘った穴は溝の下層の堆積土では確認できず、それを取り除いた溝底で検出し、溝の古い段階で橋が作られたことがわかります。また、目隠し塀と考えられる掘立柱塀10は建物13より古い時期のものです。従って、橋９は下層の式部省東官衙の時期に架けられたものとわかります。次に上層の神祇官の時期では、その東面を区画する南北方向の築地塀や暗渠排水施設１５が作られました。しかし、その後、築地塀は壊されて建物１６が建てられたことになります。

３　出土した遺物

瓦・土器・木製品・金属製品・木簡などが大溝７と大溝８から多く出土しました。

瓦では、年代決定の基準となる軒平瓦・軒丸瓦はさほど多くはありませんが、おおむね、天平17～天平宝字元年（745～757年）以降のものが多く見つかっています。また、大溝７の上層堆積土の一番下の層において、西岸に近い位置で平瓦・丸瓦の堆積を検出しました。これらの瓦はいずれも大振りであり、おそらく、築地塀１（東面大垣）に葺いた瓦と考えられます。平瓦のなかには「修」（「修理司」の意味か）という字を刻んだものがあり、大垣の屋根を修理したことがこれによって推測できます。これらの瓦は平城京廃都後に溝に投棄されたのでしょう。そのほか緑釉の軒丸瓦が１点見つかりました。

土器はほとんどが奈良時代後半のものです。なかには「北僧坊」「朝」「□支良女」「近衛」などと墨書したものもあります。また土馬も数点出ています。

木製品・金属製品は大溝７・大溝８のそれぞれ下層堆積土から多く見つかりましたが、大部分は大溝７からの出土です。木製品には、人形、下駄、籌木（クソベラ）、櫛、曲物、轆轤挽きの皿、箆、箸、六角柱の賽子などがあります。また、木刀の鞘尻も見つかりました。これは、鞘と鞘尻金具を一木でつくりだし、金具部分を墨で塗ったものです。鞘尻金具の鋳型をつくるための様（ためし。見本）だった可能性や、もともと柄側部分もあって、儀式用の刀として使われた可能性もあります。

金属製品は、釘・刀子（ナイフ）の部品・帯金具（ベルトの飾り）・銅人形などが出土しています。このうち、金銅製丸鞆裏金具が注目されます。幅 4.7㎝、縦3.3ｍ。丸鞆とは当時の役人が用いたベルトを飾る金具の一つです。通常、銅製ですが、今回出土した金銅製のものは全国的にも珍しく、平城宮で２例目、全国でも十数例目です。また、これは現在、平城宮・京で発見されているものではもっとも大きく、奈良時代の丸鞆としては日本最大級の大きさといえます。今回の丸鞆は、五位以上の貴族が使った腰帯か、または儀礼や雅楽等に用いた特殊な腰

帯につけられていたものでしょう。その他、和同開珎（和銅元年、708年）・万年通宝（天平宝字４年、760年）・神功開宝（天平神護元年、765年）などの銭貨が出土しています。

木簡は、現在のところ約７３０点（木簡約160点、削り屑約570点）を確認しています。大溝７出土木簡の時期としては、天平宝字６年（762年）の年記をもつ木簡が複数あること、木簡の地名表記が国郡郷制下（天平12年、740年以後）と解釈できること、天平勝宝年間（749～757年）に活躍したことが正倉院文書でわかる人物が木簡にみえることなどから、その上限が窺えます。これらの木簡は上流から流れてきたものと考えられ、内容的にまとまったものではありませんが、文書木簡・調の荷札をはじめ多様なものとなっています。今後の整理によって、調査区近隣の官衙の状況を知りうる資料が得られる可能性があります。主な木簡の釈文を別に掲げておきます。

４　まとめ

今回の調査で現在までに得られた成果をまとめておきます。

①東面大垣については、きわめて良好な状態で残っていたために平城宮の大垣の具体的な姿を知ることができました。また、当初から掘立柱塀ではなく築地塀で造営されていたこと、大溝７に投棄された瓦から、東面大垣が奈良時代末期に修理されたことなどがわかりました。今後、大垣の断ち割り調査によって、大垣の作り方の詳細が明らかになることが期待できます。

②奈良時代前半の式部省東官衙の時期には、官衙の東限を画する塀などの施設は存在せず、そのまま大溝８に面していたようです。また、大溝８には橋が架かっていたことがわかりました。しかし、橋を渡った部分の東面大垣には現状では門は確認できません。橋を渡ったあとの人の動き、この橋の役割は今後の検討課題です。

③大溝７・大溝８の堆積は、いずれも大きく分けて上層・下層からなり、浚渫をうけています。上層はほぼ平安時代以後、下層も奈良時代後半の堆積土です。また護岸施設が設けられていた可能性があります。

④大溝の下層からは、木製品、木簡をはじめ多くの遺物が出土しました。これらの多くは上流から流れてきたものと考えられます。今後の整理作業によって、調査区周辺の役所の状況や、当時の役人の実態を知りうる材料が出てくることが期待されます。

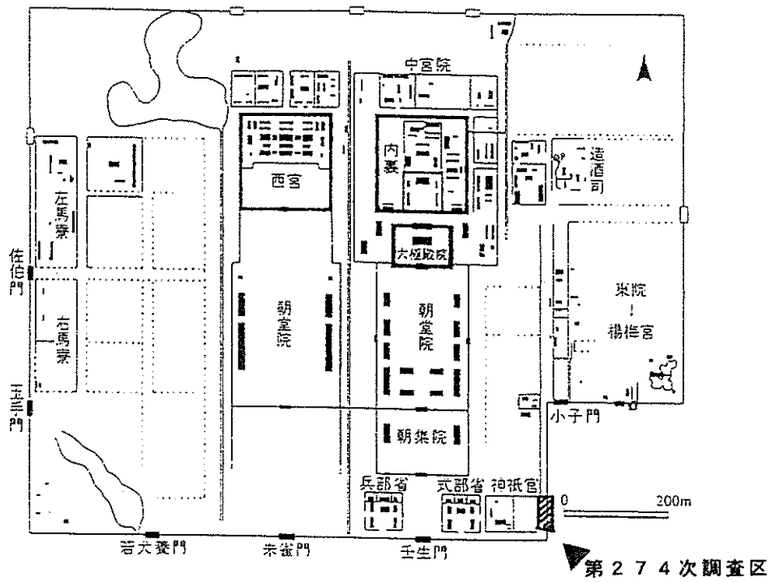


図１　第２７４次調査区位置図

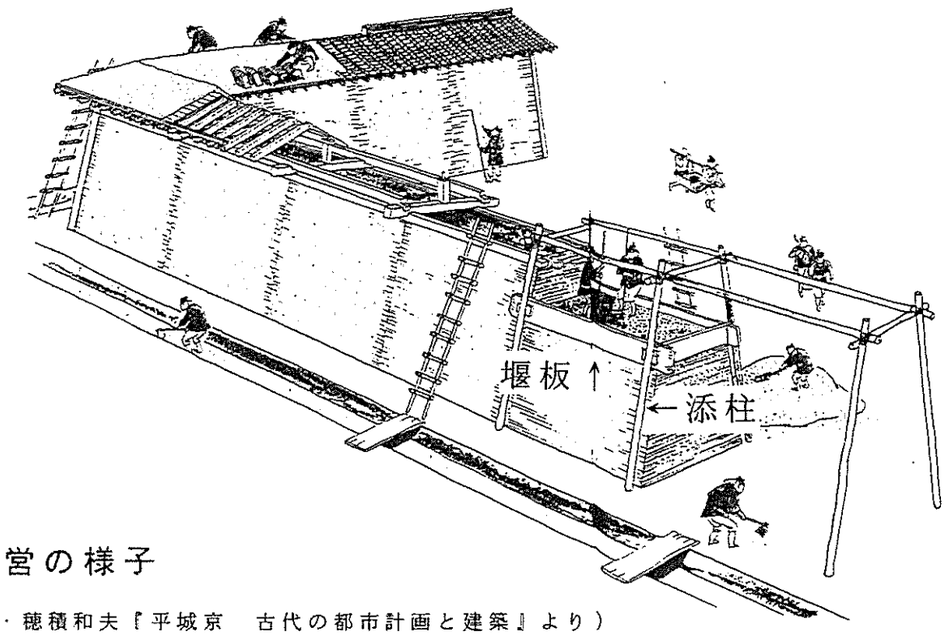


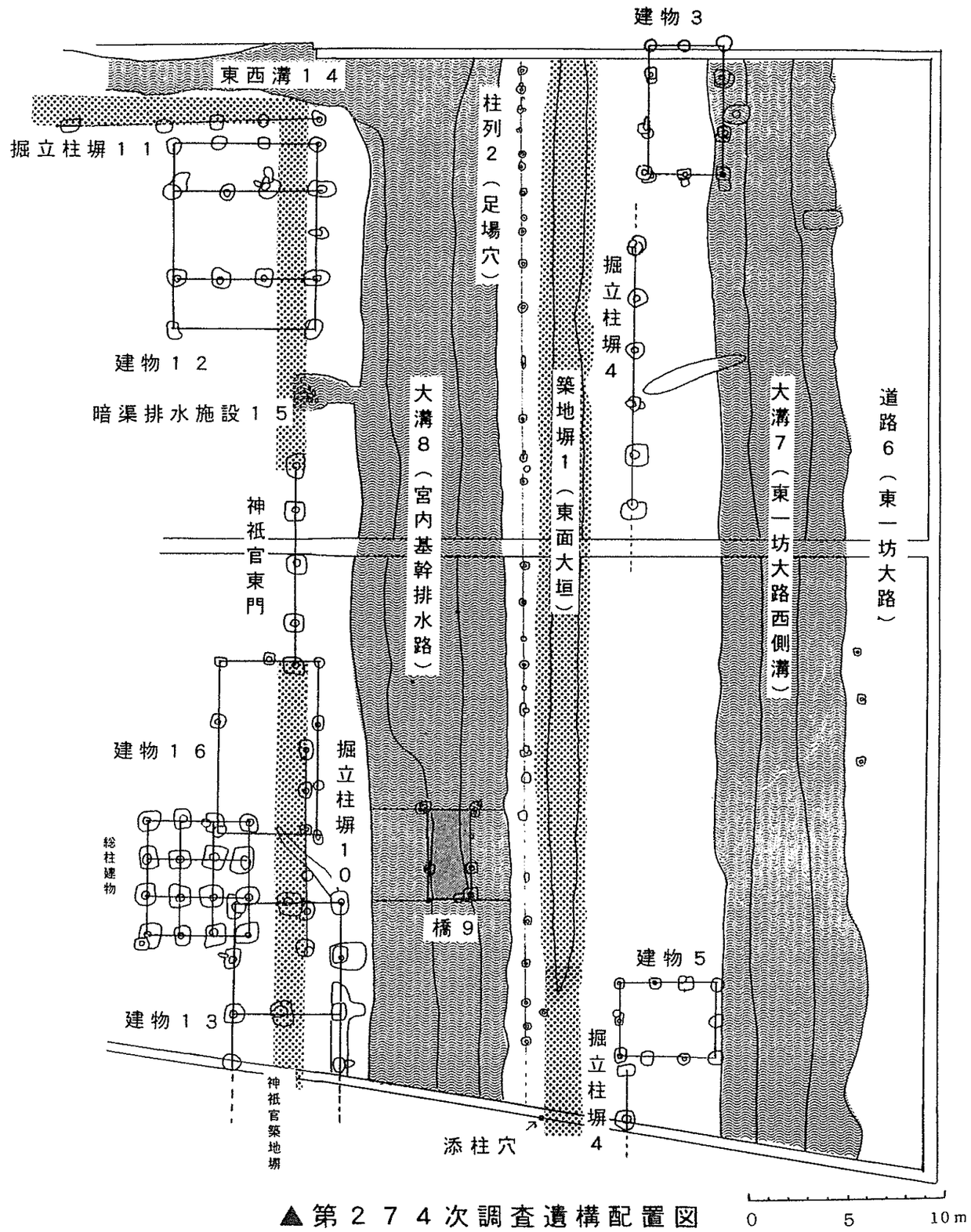
図２

築地造営の様子

（宮本長二郎・穂積和夫『平城京　古代の都市計画と建築』より）

第274次調査出土木簡及墨文

		長さ・幅・厚さ（単位は㎜）	型式
大溝7（東一坊大路西側溝）出土木簡			
1	・謹解申請給布事合□□□□□ ・請請食常□治部□□□□□□□	(210)・22・2	011
2	・謹啓　申請銭□ □注状謹□ ・［　　］	(114)・57・5	019
3	・草湯作料所請如前 ・　四月十七日吉田「古麻呂」	(160)・29・2	011
4	進酒捌升壹合　正月一日茨田嶋国	216・28・5	011
5	進酒八升一合　正月一日茨田嶋国	201・23・2	011
6	・　伊勢部吉成　畠賢達 安倍永年　湯坐三□ ・書生子部人主　大資人紀東人　四月廿六日 合漆人	(292)・(25)・3	081
7	伊勢国鈴鹿郡□□	(75)・19・2	039
8	伊豆国田方郡久寝郷物部宿奈麻呂調［	(175)・32・4	039
9	丹波郡丹波郷□	(110)・30・3	039
10	出雲国大原郡来次郷前〔雑〕□〔カ〕暗一籠 〔字〕天平宝□六年	160・24・3	031
11	出雲国仁多郡横田郷前分一籠 天平宝字［	126・31・5	032
12	神門郡朝山郷交易雑魚腊一斗	173・19・5	031
13	・o貫民領木刀進徳 ・o一千文　天平宝字六年十月	100・17・5	011
14	・o五千文重卅六斤 四両	94・22・4	011
15	・o嶋坊北一倉匙 ・o「不得預」	77・29・7	061
16	天平宝字六年（軸小口）	長(84)・径16	061
17	・□善妻娶時来 ・□眼見眼見不如手作	(144)・20・9	019
大溝8（宮内基幹排水路）出土木簡			
18	西大寺元興寺□□供養	203・25・2	065
土坑出土木簡			
19	内舎人　平〔群〕□〔カ〕	(65)・22・4	019



▲第274次調査遺構配置図